フォーカス 奥出雲創生の現在地

# 高尾小学校の落語活動

写真：第53回博報賞受賞記念祝賀寄席にて、これまでの卒業生とともに

高尾小学校が取り組む落語を取り入れた活動が、全国で注目されています。今年で10年目を迎えた落語活動は、令和4年11月に公益財団法人博報堂教育財団が実施する第53回博報賞を受賞し、令和5年2月にはパナソニック教育財団が実施する「子どもたちのこころを育む活動」で全国大賞を受賞しました。高く評価される高尾小学校の特色ある教育実践は、どのようにして生まれ、現在まで続けられてきたのか。高尾小学校の桑山校長に伺いました。

## 落語活動のはじまり

高尾小学校の落語は平成25年、若葉学級（3・4年生）の子どもたち4名から始まりました。

小規模校の高尾小学校で、当時の担任の先生が、子どもたちの表現力や人前で物おじしないたくましい心、自己開示力を育てていくうえで、落語が適していると思ったことがきっかけです。そして「にこにこ寄席」と銘打って、総合的な学習の時間に取り入れられました。

始めのころは、地域のおじいちゃん、おばあちゃんを元気にしたいと、高尾地区のお年寄り宅へ訪問させていただき、稽古の成果を披露していました。そして、子どもたちはたくさん褒めてもらうことで、もっと頑張ろうという気持ちを高めていきました。

高尾のお年寄りに笑いと健康をお届けし、元気にしたいという理念は、落語活動の原動力として現在も脈々と受け継がれています。

## 「にこにこ寄席」の飛躍

落語活動に取り組んで3年目となる平成27年には、長者の湯で開催された「高齢者ふれあいサロン」で落語を披露。初めて校区外での披露が実現しました。

翌年の平成28年には、当時の6年生が11月に開催される学習発表会（高尾っ子祭り）で落語を発表したいと希望したことをきっかけに、落語活動が全校児童に広がりました。そして亭号（落語家の芸名のうち苗字にあたる部分）も、双葉学級（1・2年）は「双葉亭」、若葉学級（3・4年生）は「若葉亭」、青葉学級（5・6年生）は「青葉亭」に決まりました。

さらに同年の大晦日、町内の玉峰山荘で落語を披露。このことが新聞やテレビで紹介されたことで、県内各地から出演依頼が来るようになり、落語を披露する機会は近隣の市町に広がっていきました。

## 2回の東京公演

落語の活動が広く知られ、子どもたちの活動の場も増えていく中で、当時5年生の「青葉亭おすし」さんが、寄席のマクラ（本題に入る前の話し）で「高尾小学校のにこにこ寄席も、いろいろなところからオファーが来るようになり、ぼくの目標であるニューヨーク公演もだんだん近づいています。」と語りました。

これをきっかけとして、担任の先生は、児童の夢を少しでも叶えてあげるため、ニューヨーク公演への第1歩として、せめて県外公演を実現したいと考えるようになりました。

こうした中、奥出雲町出身で相模女子大学の宮崎敦子先生が、高尾小学校の落語活動に感銘を受けて日本学習社会学会に働きかけてくださり、平成31年に日本大学での学会開催にあわせた初の東京公演が実現しました。

東京公演には、若葉亭3人、青葉亭4人に加え、ニューヨーク公演を夢見ていた当時中学1年生の「青葉亭おすし」の計8人が参加しました。

公演当日は、関東一円から奥出雲町や島根県にゆかりのある方、日本学習社会学会の関係者など、約100名の方に集まっていただき、大盛況でした。児童は堂々と寄席を披露し、自信を深める機会になりました。

東京公演の後は寄席の依頼が激増し、令和元年度は42回もの公演がありました。その後も、毎年20回前後の公演を実施しています。

そして、令和4年12月には、博報賞の受賞を受け、再度の東京公演も実現しました。2回目の東京公演では、会場の確保に困っていたところ、跡見学園中学校・高等学校が無償で会場を提供してくださることとなり、跡見李子記念講堂で開催しました。

高尾小学校ではこれまで、三遊亭楽磨呂師匠に何度か来ていただき、児童に稽古をつけていただいているのですが、東京公演には三遊亭楽磨呂師匠も駆けつけてくださいました。

地域のみなさんに落語を披露

平成27年　長者の湯での落語披露

落語活動を始めて以降、落語に取り組んだ児童数は累計で17名ですが、このうち12名が2回の東京公演のうちのどちらかを経験しており、多くの児童に大舞台を経験させることができています。

## 落語教育の可能性

良い落語とは言葉の力だけで、聞き手の脳裏に画像として情景が浮かぶこと。高尾小学校の児童は、落語活動の目的である「①子どもたちの表現力育成＝ネタを磨く、②人前で物おじしないたくましい心の育成＝場数を踏む、③自己開示力の育成＝マクラ」を通じて言葉の力を磨き、自己を成長させていきます。

例えば、児童が大舞台に一人で立つと、事前にどんなに稽古を積んでも一度は頭が真っ白になります。そのときに経験した孤独感、場に応じた対応力、聴衆の笑いを取ることの難しさは、児童の成長につながる貴重な学びです。高尾小学校で落語活動に取り組んだ児童は、卒業後も表現力や物おじしない心をもって各地で活躍しています。

全校での落語活動には、小規模校だからこそできる柔軟さも活かされています。落語のネタは基本的に児童が自主的に学びますが、異学年の交流が盛んで、下級生は上級生の寄席を見て学んでいきます。そのためネタを覚えるスピードが速く、どの児童も3～4つのネタは披露できます。また、もちろん、活動が継続できているのは保護者や地域の協力があってこそです。

にこにこ寄席は、高尾のお年寄りを元気にしたいと願う子どもの心の成長はもちろん、地域の人たちや聞き手の心も豊かにする無限の可能性を秘めています。

平成31年　初めての東京公演

今月号より「奥出雲創生」を総力戦で進めていくために、町の広報奥出雲も単なる情報提供では無く、まちづくりに対する背景や、関係者の思いなどにも踏み込んだ内容にしてはどうかとの職員提案があり、不定期で「奥出雲創生の現在地」として町民の皆様に伝えていくこととしました。

今回ご紹介する、高尾小学校の落語活動は、平成25年から始まった取り組みであり、当時の先生や保護者、地域の皆様の熱い思いは、今もより力を増して引き継がれ、全国にも評価される取り組みになっています。

もっと大事なことは、関係の皆様の熱い思いや愛情が、子どもたちに確実に伝わっていることだと思います。表紙の児童の皆さんの表情をご覧いただければ解って頂けるのではないでしょうか。私はこうした熱い取り組みが、奥出雲町で生まれ、引き継がれていけば人口減少に総力戦で立ち向かう「奥出雲創生」が実現できると確信しています。

奥出雲町長　糸原　保

※表紙は、令和4年12月に開催された東京公演の際の写真です。